

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 床呂 郁哉

床呂郁哉氏の論文「流動と生成——スールー海域世界の民族誌」は、フィリピン南部からマレーシア領ボルネオにかけての「スールー海域世界」における人、モノ、文化の流動とその流動に伴って現地で生起している社会的・文化的な持続と変化について、文化人類学の視点から記述、分析したものである。論文のもとになっているのは、床呂氏が1989年の予備調査以来2010年にいたるまで長期にわたって行ったフィールドワーク（集中調査は1992年3月から1995年3月までの3年間）によって得られたデータである。また、歴史的背景の分析などに関しては、欧米を含む各地で収集した文献資料等も参照している。

以下に、本論文の各章ごとの概要について述べる。第1章は、序論として、本論文の主題であるスールー海域世界における人、モノ、文化の流動（移動、越境）を論じるに当たって、先行研究のレビューを行い、理論的枠組みを提出し、本論文の位置づけを述べている。第2章では、「スールー海域世界の歴史的動態」と題して、主に前植民地期におけるスールー王国を中心とした海域世界における社会形成の動態について、近年の歴史学の知見や歴史的背景に関する文献資料も参照しながら検討している。第3章「＜境界＞の設定」では、スールー海域世界における伝統的な人やモノの流動性やネットワークが、19世紀末から20世紀前半にかけての植民地化の過程で、様々な境界の設定によって分断・再編されていく状況を論述している。

第4章と第5章では、現代のスールー海域世界が扱われている。すなわち、「越境の民族誌——スールー海域世界における流動の諸相」と題する第4章では、今日のスールー海域世界での社会や文化の流動の実態が、長年の現地調査に基づいて民族誌的に記述されている。そうしながら、今日の「海の民」が近代国民国家の制度である国境とどのように関わり、交渉しているのかという点について考察が加えられている。また、「漂海の民族誌」と題する第5章では、とくに伝統的に海上での移動生活を営んで

きたサマ（サマ・ディラウト）人を取り上げて、そのいわゆる漂海生活の実態が詳細に記述されている。

第6章と第7章では、そうした流動状況下における文化の動態の問題が扱われる。第6章『『祖先のやり方』——流動のなかの文化的持続』では、高い移動性・流動性を特徴とするようなサマ人の社会において、こうした流動性の高さにもかかわらず、一定の文化・社会的な持続性を維持し、いかにして文化を再生産しているかということが検討されている。第7章「流動と文化的生成」では、流動状況下における文化の変化・変容や生成的な側面を主題化し、とくに近年のイスラーム世界における顕著な傾向であるイスラーム復興や、グローバルな資本主義の浸透に伴う国境を超える大量移民など各種の流動状況の拡大・進展下における現地の宗教的実践、とくにシャーマニズム儀礼の変容や、イルムと呼ばれる秘儀的知識の生成・流通の事例を取り上げて考察している。

第8章では、結論として、それまでのスルー海域世界に関する個別具体的な叙述を整理するとともに、こうした流動状況のなかでの社会・文化的な再生産と生成・変容という現象について、より一般的、理論的な面から総括している。

以上の構成を持つ本論文の意義は、なによりも床呂氏のスルー海域世界に関する20年以上に及ぶフィールドワークに基づいた綿密で貴重な民族誌的な研究であるという点である。そのような長年にわたる地道な研究により、この地域の人びとや文化の流動の問題を、近代初頭から始まり欧米に起源するグローバル化（床呂氏がグローバリゼーションⅠと呼ぶもの）、近代以前に遡る歴史的タイムスパンを持ち、また必ずしも欧米を起源とするものでも中心とするものでもないグローバル化（グローバリゼーションⅡと呼ぶもの）、さらにトランスローカル／トランスナショナルな流動の現象という3つの次元において検討した本論文は、歴史的・地域的民族誌の厚みと複合性のなかで文化のダイナミズムを検討する道を切り開いた。この点は、今日の民族誌研究にとって大きな貢献である。

審査においては、本論文で議論されているグローバリゼーション概念をめぐって疑問や批判的なコメントも提出された。しかし、本論文の持つ価値は十二分に高いもの

があり、本論文は文化人類学の研究に対して重要で貴重な貢献をなしていると判断された。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。